

「光る冠の若者」

——仮の冠から真実の光へ

かつて、ある若者がいた。

彼の頭頂には髪がなく、太陽のように光り輝いていた。

人々はその光を見て、畏れ、時に嘲った。若者は傷つき、母のもとに戻ってきた。

母は彼に言った。

「この光はおまへの叡智のしるし。だが、人はまだそれを理解できない。

しばらくは“仮の冠”をつけなさい。

それが似合っていれば、人々は安心し、おまえも安心できるだろう。

だが、真実を語る時が来る。結婚の前、人生の大いなる節目に、

冠を外し、自らの光を示すのだ。

その光を受け入れる者こそ、真におまえを愛する者だろう。」

そのとき、かつて若者を嘲った者が姿を現し、頭を垂れて謝った。

「愚かだったのは私だ。冠はどうぞ、あなたの道を歩むために使ってください。」

世界もまた、彼を支え始めたのだった。

やがて若者は、美しく気高い女性と出会う。

母が見ても「よく似合う」と思える伴侶であった。

ふたりは大きな館に入り、多様な道の中を共に歩んだ。

そこで、若者は鉄棒に挑んだ。

回転し、逆さになり、再び立ち上がる——か

それは人生の変化の試みであった。

母は誘われたが、「私はもう跳べない」と微笑んで、一步退いた。

若者のそばには女性が立ち、しっかりと支えていた。

母はその光景を遠くから見守り、

「これでよい。私はもう、見守る存在であればよい」と心の奥でつぶやいた。

こうして若者の光は、仮の冠を越えて真実の輝きとなり、

母の守りから、伴侶の支えへと移っていった。

それは、世代の交代と、ひとりの魂の成長を告げる物語であった。